

まゆをとるまで

養蚕は桑の葉が大きく育つ春から秋にかけて何回か行われます。ここでは蚕を育ててまゆをとるまでの仕事を紹介します。

- ① 蚕の卵をふ化させ、蚕を蚕座という育てるための場所に移します。
- ② 蚕に桑をあたえて育てます。蚕は脱皮を4回くり返して大きくなります。蚕が病気にならないように、ふんや食べのこした葉をとりのぞきます。

また、蚕の成長にあわせて蚕座をひろげます。



蚕に桑をあたえているところ

- ③ 4回目の脱皮が終わって糸をはきだしそうになった蚕を、蚕座からまぶしに移してまゆをつくらせます。
- ④ まゆの中で蚕がさなぎになったら、まぶしからまゆをとりだします。



まぶしからまゆをとりだしているところ

- ⑤ まゆのまわりについている綿のような糸を毛羽といい、これを毛羽とり機でとりのぞきます。
- ⑥ よごれたまゆやあなのあいたまゆなどをとりのぞいて出荷します。

こうして出荷されたまゆは、かんそうさせて中のさなぎを殺して貯蔵されます。その後、まゆをゆでて糸を引きだしていきます。

学習の手引

第15号

よう
養

さん
蚕



広島市郷土資料館

☎734-0015 広島市南区宇品御幸二丁目6番20号
☎(082)253-6771

かいこ 蚕 と よう さん 養 蚕

蚕は桑の葉を食べて育つ昆虫です。蚕は脱皮をくり返して大きくなり、さなぎになる前に口から糸をはいてまゆ（繭）をつくりまします。

このまゆをゆでてつむぐと絹糸という糸ができます。絹糸で織った布は、軽くてはだざわりがよく、つやがあります。

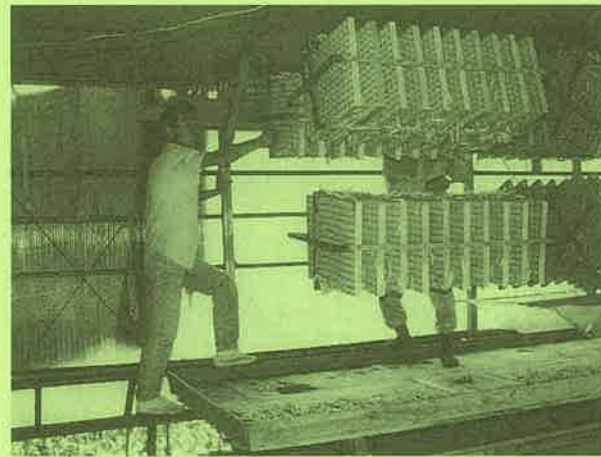
人々は絹糸をつくるため、古くから桑を栽培し、その桑で蚕を育ててまゆをとってきました。これを養蚕といいます。養蚕は中国大陸ではじまり、日本へ伝わってきました。



糸をはきだしそうになった蚕を集めているところ

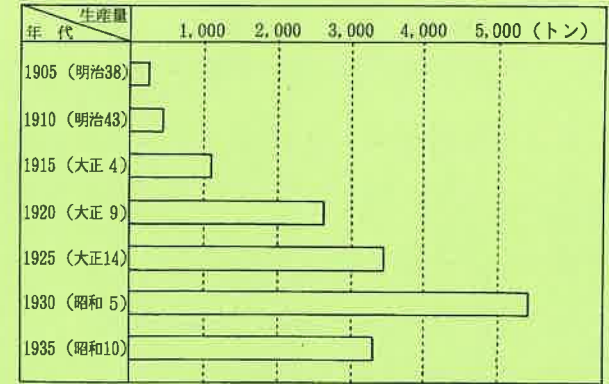
日本にいつごろ養蚕が伝わったのか明らかではありませんが、今から1,700年くらい前にはすでに養蚕が行われていたようです。

奈良時代や平安時代には、全国各地から絹糸や絹の布が税として都へおさめられていました。しかし、養蚕がさかんになったのは、江戸時代の終わりごろに外国へ生糸（まゆからとったままの糸）を売りだすようになってからでした。それから太平洋戦争がはじまる前まで、生糸は日本の大切な輸出品でした。太平洋戦争の後、化学繊維が発達したり、外国から安い生糸が買えるようになったりして養蚕はあまり行われなくなりました。



蚕を移したまぶしを天井からついているところ

広島県のまゆの生産量の移り変わり（1905～1935）



『広島県農業発達史』第4巻より作成

よ う さん 広島の養蚕

今から1,000年あまり前に書かれた資料によると、今の広島県からは、税として質のよい絹糸や絹の布が都へおさめられており、養蚕がさかんに行われていたようです。しかし、その後はおとろえてしまい、江戸時代になって、広島藩が養蚕をすすめたが、あまり成果はありませんでした。

明治時代になると広島でもようやく養蚕がさかんになり、昭和の初めには米・麦の次に大切な農産物となるほどになりました。しかし、昭和5年をピークに、しだいにおとろえていきました。